

家族の思い出が詰まったマイホームを手放す際の心の整理を付けてもらおうと、ポラスグループの中央グリーン開発（越谷市）は、棟下式ならぬ「棟下式」を執り行い、好評を得ている。

マイホーム解体で心の整理 ポラスグループ会社が企画

「棟下式」所有者に好評

棟下式は同社の造語で、古い家屋の解体前に清はらいなどを行う。新築戸建ての分譲・販売を手がける同社が、棟下式を企画した理由はなにか。中村高志CSV推進室係長は「土地を仕入れた後、そこにあった既存の建物をただ壊すだけで良いのか。そういう思いが社内に広くあった」と明かす。

所有者側の思い入れの強いマイホームはなかなか取り壊せない。心の整理をつけてもらうことは、空き家問題の解消にもつながる。実際、土地を相続・売却する施主からは「区切りが付けられ、気持ちが晴れた」という感想が多く寄せられているという。

4月、さいたま市浦和区岸町にある山田輝代さん（92）宅。同社による14件目の棟下式が行われた。地元神社の神主が祈願した後、山田さんと娘、孫2人の4人が室内を見て回り、写真のスライドショーで懐かしい日々を振り返った。最後に、4人は山田さんの亡夫が植えたサクラランボの木の枝を使った色鉛筆を受け取り、思い出へと昇華させた。

山田さんが岸町で住むようになったのは1969年。翌年にはピアノと電子オルガンの教室を開き、77年には夫婦の趣味に合わせ、白壁に柱やはりを露出させた「チューダー様式」の外壁など洋風に一部改築した。半世紀近くの思い出が詰まった家の棟下式について、山田さんは「本当にありがたい」と話し、娘の小沢真弓さん（67）も「いきなり壊されて、次に来たときに更地だったら母はショックだっただろう」と思いやった。

棟下式は、社会の課題解決などを表彰するグッドデザイン賞を2019年度に受賞している。審査員からは「建物解体後の気持ちのやり場、その瞬間を想像すると絶妙にふに落ちる儀式だと思う。クラッシュ&ビルドされる今までの経過を考えると、このように心にとめる行為は必要だったはず。意味を深める活動として、今後のひろがり」に期待している」と評価された。

同社は「サステイナブル（持続可能）なコミュニティ」は住む人を幸せにする」をキャッチコピーに、住宅の分譲・販売以外のさまざまな活動に取り組む。2013年からは分譲地のコミュニティを支援しようと「マチトモ」と呼ぶ事業をスタート。地域のボウリング大会の費用補助など100回以上に上っている。中村係長は「東日本大震災を機に、顔が見える関係の重要性が高まった」と言う。棟下式の第1回は17年、ある企業の研修所

を再開する際に行われた。地域住民が運動会などで使った施設でもあり、700人以上が集まったという。

棟下式は20万円ほどの実費のみで、同社の利益はない。また、住宅解体前に、再利用可能な建材は地域住民や古民家好きの人に提供することもあるという。中村係長は「今後、事業としてリフォームなど循環型社会への貢献にも力を入れたい」と考えている。



神主を招いて開かれた「棟下式」＝いずれもさいたま市浦和区で



50年近く暮らした家の解体を前に、思い出を語る山田輝代さん（右から2人目）ら家族